



## VANITAS

## VANITAS

ガ 入 江 に て

い遂げたこのワインは、さぞかしおいしいことだろう。

ワイン

ていくのを見守ることとなった。 ンを開けて飲みましょう」と恋人は言った。ワインは彼の本棚の上に置かれ、彼が小説家になっ 彼が小説家を志したとき、そのワインがプレゼントされた。「あなたが大成したら、このワイ

こりをかぶっていた。 出版社からの連絡がなくても、原稿を出すペースは変わらなかった。五年が過ぎた。 彼は文章に熱心に取り組んだ。次々と原稿ができあがり、封筒に入れられ、出版社へ送られた。 ワインはほ

きつづけた。本棚の上にも本が並べられ、ワインは部屋の隅に置かれた。 ワインがプレゼントされてから八年が過ぎるころ、彼は恋人と別れた。 それでも彼は小説を書

が出版されることはなかった。彼は文句ひとつ言わず書きつづけ、やがて死んだ。 彼の友人が結婚し、子供が生まれた。彼の親がこの世を去った。彼は書きつづけた。彼の小説 彼の半生を添

空からの空

佐藤芙有

息苦しそうだったので、持って出てきてしまった。 ートーヴェンのソナタ集に挟まれていたふるい手紙を、実家の自室で読み直すのはいかにも

ている相模原のアパートに帰るために、千代田線直通の各停に乗り込んだ。実家の最寄り駅を通 ていた。そのまま開かずに捨ててしまいたかったのだけれど、なぜかそうできなかった。 冬の日差しが降る南柏駅のホームに、 部屋の本棚に並んだ楽譜を整理していて見つけた。グレーの封筒は記憶よりもよれよれ 緑色のラインの電車が滑り込んでくる。一人暮らしをし になっ

ど今頃、十二月の、二学期の終業式の日だった。 手紙をもらったのは、三年前だ。僕は高校二年生だった。とても遠くおもえる。季節もちょう

るこの唯一本の路線には、高校時代からずっとお世話になっている。

帰りのホームルームが終わってざわめく教室で、

「ちょっといい?」 成績表を受け取り、 目を泳がせる僕を冷たく一瞥して、彼女は

矢田さんは物静かなひとだ。おとなしいというよりは、いつもとがらせるようにつぐんだ唇に、

目を伏せてトートバッグのなかをさぐっている。まつげが長い。バッグは、かわいいキャラク

つんけんした感じを受けた。

く汚れている。 ターも個性的なイラストもプリントされていない、クリーム色の無地だった。底の部分が少し黒

これ

には何も書かれていない。 と突き出されたのが、そのグレーの封筒だった。中身の紙でかすかに膨らんでいる。おもて面

が増えていくかもしれない……。 い。でも肩までの柔らかそうな髪の毛はきれいだと思う。もっとよく知ればしっくりくるところ 矢田さんが僕にラブレター? 全く予想外の展開だ。はっきりいって彼女は僕のタイプではな

「違うわよ」 と言った。

9

ほら、と裏返した封筒に書かれた差出人の名前は、さらに意外なものだった。

中学校の文集で見たのと同じ筆跡だと思った。ひとの性格は変わっても、 青柳祐介。 筆跡はあまり変わら

それじゃ、と踵を返しかける矢田さんをあわてて呼び止めた。

ないのだろうか、とぼんやり思う。

「なんできみが、あいつの手紙を僕にくれるの?」

「あなたに渡してほしいって頼まれたから」

席を立ったのか、椅子がきちんとしまわれず、斜めに飛び出していた。 青柳は同じクラスにいる。 窓側の一番前の彼の席を見ると、すでに空になっていた。

いそいで

僕は矢田さんに尋ねた。

「青柳と仲がいいの?」

「あっつって長丘元気なの」「仲はさほどよくないわ」

「あいつって最近元気なの」

「元気ってどういうことかしら」

僕はめんくらった。彼女は淡々と言った。

「ひとが元気かどうかは私にはわからないわ。でも青柳君は、とくに体調は崩していないと思う

「矢田サーン」

「原サンが呼んでるよ」 まのびした声が割り込んでくる。教室の前の引き戸のところで、背の高い田部が手をあげていた。

矢田さんは僕にかすかに目礼すると去っていった。 田部とともに戸口に立っているのは隣のクラスの学級委員だった。

「なになに」

入れ違いに傍にやってきた田部が訊く。

「ツンツン委員長と何話してたの?」

「いや、なんか青柳からの伝言? みたいなの渡された」

「青柳? なんで矢田サンが?」

「そこが、わからない」

「……あ、そうか」

田部は思い出したように掌を打つ。

「そうなの?」 「青柳と矢田サンって付き合ってたっけ」

さない。 二年生の今よりはだいぶ快活だったらしい。今の青柳は、クラスではほとんど誰とも話

年生のとき田部は、青柳と矢田さんと同じり組だった。その田部の話によれば、

青柳は少な

嫌そうじゃなかった。 う。青柳は恥ずかしそうにしながらも笑っていたし、矢田さんも顔を真っ赤にしていたけれど、 去年の十月、合唱祭のあとの打ち上げで、ふたりが付き合っていることが皆にばれたのだとい

別れたって情報ないから、まだ付き合ってると思う、と田部は言った。

ら、僕はつぶやいた。 「矢田さん、仲はさほどよくない、って言ってたけど」 今年は、スポーツ祭も合唱祭も文化祭も、青柳は打ち上げに出たりしなかったな、

と思いなが

「照れてんじゃね?」

「ヘエー」

田部は黒縁の眼鏡を押し上げて言う。

「でも、今思えば青柳って暗いやつじゃなかったよな。今はほぼ、影うすいじゃん?」

「中学のころはクラスでも中心のほうだったよ」

そうなのだ。

と僕は思い出しながら言った。

「うん。じつは主んでる?「中学一緒だったのか」

「マジかよ?」

田部は目を丸くする。

「おまえら、ぜんぜん他人っぽいじゃん」

「そうだねぇ」

たしかに今は赤の他人だと思う。

「ケンカしたの?」「中三まではまあまあ仲良かった気がする」

「いや・・・・・」

しかし一年間違うクラスになってあまり接する機会がなくなったあと、再び同じクラスになった ケンカをしたわけではなかった。 合格発表の日に、同じ高校だなと、笑い合った記憶もある。

とき、彼を包む空気が変わっていた。もしかしたら僕を包む空気も変わっていたのかもしれない。

「仲直りの手紙かね」

親しく話すことはなくなっていた。たぶん、一言も交わしていない。

「やめろ、なんかきもい」

としていた。

校の誰ともしゃべっていないのではなく、矢田さんとは話す機会もあるのだと知ってすこしほっ それは本心だった。正直なところ、現在の青柳にはあまり関わりたくなかった。 ただ、彼が学

と興味津々の田部を「開けてみたら」

と言ってかわし、教室を後にした。「わるい、習い事があるんだ」

生は東高円寺にある邸宅で教えていた。 受け取った手紙を読んだのは、学校帰り、ピアノの先生の家に向かう千代田線の中だった。 レッスン室にはベーゼンドルファが二台並んでいる。 玉 先

レポート用紙に手書きされた青柳の手紙は、

会議事堂前で丸ノ内線に乗り換えてゆく。

「もう何も考えられない。」

「つかれた。」

ではじまり、

うに思えた。閉鎖的な地下鉄のトンネル内で、雰囲気にあてられてなんだか頭がぼうっとした。 きちきちとボールペンで刻み込むように並べられた文字が、何ともいえない力を放っているよ

閑静な住宅街のなかにある先生の家に着き、鍵の開けてある玄関ホールに入ると、 どう反応したらよいのか。とりあえずレッスンを終えてから考えようと思った。 激しくも滑

げんなりもしていた。

で終わっていた。

時間になったら、前のひとがレッスンをしていても部屋に入ってよいことになっていたので、

らかな演奏が聞こえていた。ドビュッシーだろう。喜びの島。

五時半になったことをたしかめ、ノックしようとする。 とたんにキャンキャン足にまとわりつくものがあり肝を冷やした。先生の愛犬のパピヨンであ

った。ぺろぺろ舐めてくる攻撃に足止めをくらう。

ややあって小柄で眼鏡をかけた先生が扉を開けて出てきた。

「ジョゼ、さわがない

. の

「尾島君、いらっしゃい」

「こんにちは」

ピアノの前で楽譜をしまっているのは姉弟子の、大学生の亜美ちゃんだ。 今日は襟付きの小花

柄のワンピースを着ている。まっすぐな栗色の髪が背中で揺れた。 に通っている。前の先生の紹介で、千葉県から通っている僕は、なんとなく場違いな感じはある。 先生の家はお金持ちだし、亜美ちゃんも実家が荻窪にあるお嬢様だ。由緒ある女子大の哲学科

それでも持ち前の屈託のなさで、先生や先輩の生徒さんからかわいがられていた。 「先生、ありがとうございました」

「また来週ね」 亜美ちゃんは完璧にきれいな笑顔でほほえんで挨拶をした。

先生はジョゼを抱き上げ、

「ケージに入れてくるから少し待っていてね」 と奥の住居スペースに消えていった。

ふわっと甘い香りがして気付くと亜美ちゃんがすぐ横にきていた。

と彼女はにっこり笑って言った。

「モスバーガーで待ってるからね」

亜美ちゃんはお嬢様だけれど、 ジャンクフードが好きだ。そういうところがい

į, と思う。

その日の僕のレッスンは、バッハの平均律クラヴィーア曲集第一巻の十番、 **ホ短調のプレリュ** 

ドとフーガ、それとベートーヴェンのピアノソナタ第十二番の第三楽章だった。ベートーヴェ

ることができた。その日もそういう日だった。我ながら音の他のものが見えないほどの集中力だ 他に何か心配事があったり気になることがあると、より無心に曲のなか

星の光を通すがごとくだった。 特に平均律のフーガの、十六分音符を刻む指先の感触に陶酔した。 宇宙にいくつも針を刺して

当時の僕は「ふつう」を模索していた。

だからこそ、高校二年生になったかつての友人の変化の仕方を、是とはできなかった。彼、青 いや、ただのふつうでは駄目だったろう。 ふつうのなかの 「ちょっといいほう」 を目指していた。

柳は、「ふつう」からは著しく外れていきはじめていたから。

は微妙なところではあったが、意外にも僕は堅い感じのクラシック音楽が好きだったし、都内に 自分についていえば、ピアノを弾く男というものが、目指す「ふつう」の範疇であるかどうか

レッスンに通うことで受ける恩恵が大きかった。東京の風、ひと、雰囲気。僕が触れられる、 ほ

空の空

2 待ち合せしたモスバーガーの奥まった席で、亜美ちゃんは文庫本をめくっていた。テーブルに のわずかな隙間から漂うそんな匂いを、なるたけ鼻をふくらませて味わった。

「九鬼周造」

は食べかけのオニオンリングのバスケットがあった。

「何読んでるの」

向い側から小さな表紙をのぞきこんだ。

彼女は言った。「いき」の構造、とある。

で押されていた。 亜美ちゃんこそが、僕の「ふつう」を「ちょっといいほう」にひっぱってくれそうな存在だっ 文庫本はフィルムでカバーごとコーティングしてあり、ページの上部に彼女の通う大学名が判

た。彼女はかわいい。かしこい。そして安定して「ふつう」である。 ホットコーヒーとモスチーズバーガーを買って席に戻ってくると、

「今日はどうだった?」

「バッハは、うまく弾けた」 と彼女はたずねた。

「わたしはあんまりかな

華奢な指で、きれいな形の耳に髪をかけて言う。

「でもいいや」

ふふ、と僕たちは笑いあう。

「あさって、十一時だよね」 と僕はたしかめる。

「うん、原宿駅前ね」

亜美ちゃんはうなずいた。

あさってといえばクリスマス・イブである。先週のレッスンのあと一緒にご飯を食べたときに、

彼女が、デートしよっか、と誘ってくれたのだ。

「表参道あたりおさんぽしよう」 と亜美ちゃんはにっこりする。

「かーわいい」 僕はうれしさをかくさず、にまーと笑ってうなずいた。

僕はかわいがられている。 彼女の小さな手が頭の上にポンとのった。

「学校で何かおもしろいことはあった?」

「おもしろいっていうか……」

瞬迷ったのだが、放課後にもらった手紙をみせることにした。

僕はバーガーにかみついた。

少しの時間、彼女はだまって目を通していた。右の眉がすこしひそめられているようにみえた。 かさかさ、と封筒のなかのレポート用紙をひらく。二枚にわたって文字でぎっしり埋められて

やがて、

「なにこれ」

「いたいわねえ」 それ以上なにも言わずに、手紙を丁寧にたたんで封筒に戻した。 小さなため息をついて、亜美ちゃんは笑った。

当時の僕は「いたい」ことに敏感だった。すこしでも「いたい」ことが目立つのは、「ふつう」

「いたい」は絶対の否定の言葉に思えた。

ではないと考えていた。

てみていた。それを書いた青柳のことも。 だからそのときは、亜美ちゃんが「いたい」と形容した手紙を、かなりの嫌悪と哀れみをもっ

でも三年を経た今、再び手紙を開いてみると、感触が異なっている。そのころ解釈したよりも

れほど小さな、宝石の粒のような車が連なる。

可能性に思い至るようになった。 ずっと優しいまなざしで、亜美ちゃんが手紙を読み、その言葉を発したのかもしれない、という

電車は松戸駅を通過する。

かる。 あっている。僕は長椅子の端っこに座り、お尻を温める暖房を感じながら、銀のパイプに寄りか うす黄色の日差しが、窓の外を満たしている。空に雲は見当たらない。電車内はそこそこ混み

そうして読み直した青柳の手紙は、こんなふうだった。

もう何も考えられない。

この体とほぼ同じ大きさの体が数体ずつ収まっていると、頭ではわかっても実感はできない。そ 蛇のようにくねる道路の上に、赤や橙の光が連なって流れていく。それら一つ一つの内部に、

体で実感する事柄だけを、「本当のこと」だと信じて奮闘してきた。

知っていても実感できないことばかりである。

嘘をつかない方が全うなのが前提である。 い人間関係を築くためには」。そういうことのために「あえて」嘘をつけ、というのだ。つまり る。例えば「うまく世を渡っていくためには」、それから「(何かいい物を)つくるためには」、「よ ときどき裏をかくように「嘘をつかなければいけない」とされる場合には、必ず条件がついてい この世に生きていると、「嘘をついてはいけない」と誰からともなく論されるのはなぜだろう。

に残る、より純度が高く大切な核心。その人にとっての「真実」と言えるのではないか。 と。そのとき嘘に守られるものは、優先順位の低い周辺の事柄に嘘をついて剥がれていったあと を壊さないこと、「美しいもの」をつくること、「他人」を取り返しのつかないほど傷つけないこ どっちみち「本当のこと」を優先しろと言われている気がする。 しかもそれらの嘘は、つくことによって、何か別のものを守ろうとしている。例えば「自分」

の人にとって」ではあり得ないから、これはもう僕のするべきことだと思った。それに従うのが とって最も本当味のある本当のことを、守りたいと思ってきた。「自分にとって」本当のことは、「他 そのことに反発したいのではない。僕も心からそう信じている。「本当のこと」、それも自分に

様」のような存在だけは、僕に微笑んでくれるのではないかと思った。僕が世界を感じるやり方 ひいてはその「本当」を感じるそれぞれの人に課された仕事のようなものだと。 じれば、他のどんな人の思いに沿わなくても、 まあどこかにいるかもしれ

は、僕が自分で決めたわけでも、親や教師に与えられたものでもな

61

ぜか僕に引っかかって星座のようにつながって意味を持ってこの頭の中に残っているものたちが れ落ちてたくさんの時間を過ごし、体を通り過ぎていった膨大な量 そのつながりはさしずめ僕の歴史といった表情でこの頭の中にある。 の些細な経験の 僕は自分で考えて、 中で、

な意味があるかのように残っている。そのザルは、僕が自力でつくったものとは決して言えない。 その目を通して多くの事柄を忘れ去り、たまたまのように引っかかって残った記憶が、さも重大 どういうものなのか自分ではわからない。 その自分を説明する物語を所有していると思いきや、僕の意識に残る経験を拾 そういうザルをつくったものを便宜的に なぜかい 「神様」と考えている。 つのまにか僕の体内に形成されているザルが、 かみさまと言っても、 い上げる規準が 例えば

いて、一人一人の中に独立してあるとは言えない。人間という生き物は、数はたくさんいるけれ 一人の人型をした存在が、皆のザルをつくれるとは思わない。というか皆のザルは呼応し合って

だ。その関係し合い様の大きさや深さは(さらに人間以外との関係まで考えたっていいのだけれ その一人一人が持つザルの共鳴し具合つながり具合から見ても、 全員で一つの生 一き物

空の空

ど)僕にはもう考えも及ばない。それだけの大きさを感じるものなら、もうそれが

「神様」でも

たのだ。(承認されたいという考えや、その方法を、与えられた役割に奉仕することに求める発 きなものが僕の体内に形成したザルが指し示す、「本当のこと」に忠実になればいいと考えてい そういった大きなものから、この小さな体が、ここにあることを承認されるためには、その大 い。というかそういう大きさを感じることが僕に必要なだけで、神様でなくてもいいのだ。

想も、僕のザルが導き出したものだ。)

心底疲れ切った声が聞こえる。それは僕の胸郭を震わせ、隙間風のよう掠れて喉を抜ける。 なくても腐らず悲しまず僕の本当に仕えるのだと、思う。そう思っていれば平気なはずなのに、 でも今、僕の体はこんなところに立っている。頭では、信じる、と、どんなに誰にも認められ

「神様」に課された「本当」が示すのが、ここだとしたら、それに殺される。 否、僕にこのまま、それに従う力が無いというだけのことなのだろう。もっと強ければ、壊れ

ずに「本当」に奉仕できるはずだ。

れを輪にして首飾りにして、お守りにしたなら、また一人で新鮮な気持ちで「本当」に奉仕でき 小さな車のライトの連なる流れに、このまま手を伸ばせば掴めるかもしれ ない。あ の美し 流

しかし掴む前に体はぐちゃぐちゃだろう。既に落ちているだろう。

るかもしれない。

この体がなくなったら、僕の本当もなくなる。 僕の本当は、「この体が本当だと感じること」

めるけれど、それに従うように体を動かすにはもう力が出ない。動かすやり方をもう考えられな を理解してその通りに振る舞うことだからだ。 「本当」を課された一つの体を手放したい。空に溶かしてしまいたい。「神様」の示す流れは読

つかれた。

その夜、東高円寺からの帰りの電車のなかで、僕は青柳にメールを打った。

た。そうでなければ、 亜美ちゃんに見せた後だったので、外の空気が吹き込まれたように、気持ちに余裕ができてい 彼に連絡など取ろうとしなかったろう。

それだけ送った。「大丈夫か?」

南柏駅からバスで十分の七階建てのマンションに、僕の家はある。五歳の時に、 家族三人で都

りしていた。

内のアパートから引っ越して来た。

六階の真ん中あたりの部屋である。

同学年の子どもは女の子ばかりだったので、自然に一番親しくなった。連れ立って学校に通った 新一年生になるとき、同じ小学校に通う同級生として友達になった。マンション内の他 それから、 青柳の家もある。うちも青柳のところも、新築のころに入居した世帯だ。 青柳とは、 の同級

ていた。 青柳の家は五階の角部屋だった。彼の家には、北側に、他の家にはない大きなバルコニーが 彼の家の下に、四階までは北隣にもう一つ家があるのだが、五階より上にはなかった。

隣の家がない代わりに広いバルコニーがついていたのだ。個人宅が所有する屋上のような空間だ

そこには竿を二本渡した物干し台があり、 いつも、 ハンガーのフックを洗濯ばさみで挟んで飛

ばないようにした洗濯物が揺れていた。

そのバルコニーに何度か遊びに行った記憶がある。

中学二年生か三年生のころだったと思う。

たらよさそうな、寝そべることのできる椅子があった。丈夫な荷造りテープのようなもので編ま 木の丸いテーブルが置かれていた。 その 面 『脇に、 海水浴場で日焼けするため につかっ

れた座面は、一つが白と水色、もう一つが白とレモン色の組み合わせでできていた。

青柳は言った。

「お日さまのところだけ手で隠せばましになるよ」

「視界の端っこにお日さまを入れたまま、がまんして空をみてると、涙がでてくる」 そう僕は教えたが、彼は手をあげることはせず

そんなに無理しなくてもいいのに、と思うが、

と言う。

「涙の膜がにじむと、空が二重になったみたいでい いよ

と、時折目をしばたかせながら飽きずにながめている。

高校に入ってから、僕はソフトコンタクトレンズに変えたのだが、そのころは眼鏡を常用して

室内で、眼鏡だけに光が当たるような、何かの条件を満たすとき、レンズに涙のとろみらしき

流動が映りこむことに気づいていた。瞬きに応じて、すこし気泡を含んだ薄い液体が動くので、

たぶん眼球をおおう涙なのだろうと思っている。 青柳の話をきいて、その個人的な発見の話をしたかったのだが、どう言ってよいかわからずに

27

空の空

いた。

そのままになった。

「晴れてても空って不透明にみえない?」

「不透明?」

と彼は問う。

「うーん、透明なはずなのにね?」

「ポスターカラーで塗りつぶしたほうが、透明水彩の絵の具より空っぽくなりそうってこと」

「どこからが宇宙?」 「宇宙まで透けている」

「わからない」

「どこまでが空さ」

「わからない」

冬の午後で、僕は膝まである紺色のダッフルコートに、青柳はたしか茶色のダウンにくるまっ 覚えているのは、お互いに相手の姿を視界に入れずに空を眺めていたという雰囲気だ。

寒風に吹かれていたことと思う。

ただうすい黄色の日差しはちょうどよく暖かかった。

「空を眺めていると、ちりちり銀色の細かい虫みたいなのが見えない?」

「うん。でも虫は嫌だな、これたぶん僕らの目玉の血管でしょう?」

「そうなのかな?」

「血管を通る血液の流れが見えるんだと、思ってたけどね」

「気持ちわる……空ってまっさらじゃないね」

「ゆらゆらしている」

「何か見える」

「天使さまの羽根だね!」

「何に見える?」

「虫とか鳥とか飛行機とか、そういう形のある羽根じゃ限られた場所しか飛べないでしょ」 それには応えずに、僕は口をつぐんだ。そういう発想はあまり好きではなかった。

彼はひとりで話す。

「天使ならもっと空全体に広げるでしょ、それにここまでが羽根でここから羽根じゃない、

のは、無いと思うね」

空の空

があったり、住宅地があったりし、電線もたくさん走っている。また上を向くとマンションの上 ンションの周囲はうるさかった。交通量の多い道路をはさんで向い側にスーパーマーケット

僕のそういう集中力は、ピアノを弾くときにも生きる。

空だけに集中するという遊びをしていた。

階が部分的に目に入ってくる。僕はひとりで、そういうものをなるべく視界の外に押しやって、

選んだものに身を沈めることによって、まっとうに逃避するという技である。

そう言って、青柳が立ち上がる気配がする。

「とべたらいいのにな」

上がるように空を見上げていた。 身を起こして目で追うと、彼はバルコニーの端の、胸くらいの高さの柵に両手をついて、

「とぶ、というか、溶けてもいいね」

「空ににじんでとけちゃうのさ」

「とける?」

ている自分の体さえ、視界の外に押し出してしまって。 そんなこと、僕ならできている、と思った。見ている空以外、なくしてしまえばいい。空を見

でも教えてあげなかった。

冬休み初日の明け方、まだ暗い自室で目をさましたとき、直前までの浅い眠りのなかで、その

もわからなかった。 いの上に置いてあるグレーの封筒が、ずっと静まっていた記憶の湖面に、 夢の底から浮き上がってきた記憶は、とてもふわふわしていた。どこまでが正確な記憶か 石を投げ込んだのだ

し味わいたくて、再び浅い眠りへと戻った。 夢は、楽しくもないし、どちらかといえば殺伐としていた。 けれど居心地悪さも含んでもう少

ではり続き : www. こことに、これで、これで、これで、これで、これで、人しぶりに寝坊をした。

枕元の携帯を確かめたが、メールは来ていなかった。

やべりであるようだ。 リビングに行くと、 母が電話中だった。口調から察するに、マンション内の主婦友達とのおし

台所に入って換気扇をまわし、やかんを火にかける。

える。その先に、背の低い住宅街を見下ろせる。いくつもの屋根の上に、今日も澄んだ日差しが コンロの脇には、ベランダに出るガラス張りの扉があり、我が家の洗濯物が揺れているのが見

「あそこのご夫婦ねぇ……そう五階の」

粉を一杯半入れる。

斗とろ紙をコーヒーサーバーにセットする。ろ紙のつなぎ目は、

紙を開く前に折りこんでお

「そう、旦那さんのお仕事がだめに……お気の毒ねぇ……」

しゅんしゅん、湯が沸いたら換気扇を消し、

やかんの取っ手にぬれふきんをかぶせて持ち上げ

粉の上に少量そそぎ、少し時間をおく。

くらんだ。しかしそれは挽きたての豆の粉を使う場合の話で、あらかじめ挽いてある市販のもの いというのを見たからだ。テレビでは、お湯を垂らすとスポンジケーキみたいにふかっと豆がふ これは以前にテレビで、ドリップでコーヒーを入れるときに、こうして豆をふくらませるとよ

「ああ、そうそう……すれちがっても挨拶もなしよね……昔はうちのが遊びにいったりしていた

を使う家では、少しもふくらまないのだった。

けど」

台所とリビングの間の壁を隔てているが、また母もあまり大きな声を出さないように気をつけ

ているようだが、電話にむかって話す言葉は聞こえてきた。

頭の中でバッハの平均律が鳴りはじめた。

と奇妙な場所だと思う。 屋が集まった家というのは奇妙な場所だ。 その家が集まりあったマンションというのはもっ

刻みはじめる。 黒くふかふかのクッションで両耳をやわらかく塞ぎ、とろんと優しい密室のなかで、 指が音を

ンのプラグを差し込み、スイッチを入れる。

き足りたころには午後三時をまわっていた。集合住宅の不文律のようなものがあるとは 電話を終えた母が、用意しようかときいてくれた昼食をパスし、弾きつづけるのにようやく飽 いえ、

の十時を過ぎればピアノの音を出してもよかったのだが、その日はずっとサイレントで弾いてい

さすがにお腹がへったので、近くのコンビニに行くことにした。

冬の外はもう日が傾きはじめて橙色を帯びていた。

た。気分的なものだ。

マンションには二本の階段と一つのエレベーターがある。エレベーターの近くにある方の階段

を下りていくと、五階の角部屋のバルコニーが見えた。

のだから、 ぶん久しぶりにそのスペースを見たような気がした。 目に映っていないはずはなかったのだ。だが、そこをそことして認識したのは、 いや、 毎日のように階段を利用 もの

空の空

がはためいていた。しかし今では全く様変わりしていた。まるで物置のようだった。 そのバルコニーを見たことはないように思った。 遊びに行ったころの記憶では、そこはすっきりと片付いていて、住む者の営みを感じる洗濯物

すごく久しぶりであった。ひとは自分勝手に世界を見ている。すくなくとも高校生になってから、

のだろうか、トースターや電子レンジや炊飯器が転がしてあるのが見えた。 の物干し竿は、二本のうち一本が、片端を地面に落として斜めになっていた。そのほか、壊れた 丸テーブルはひっくり返され、重ねた二脚の長椅子とともに隅におしやられて汚れていた。裸

とはすぐに思った。 「もう何も考えられない。」ではじまり「つかれた。」で終わるその手紙は、まるで遺書のようだ

青柳ハ死ヌツモリナノカ? 思ってはみたが、我ながら実の伴っていない思考だった。 頭の中

にワープロ文字で浮かべただけのような考えだ。

したほうがよいのか否か、と考えていたわけだ。しかし考えているということは、 つまり、僕はその手紙を受けて、もっと焦ったり、何とかして連絡を取ろうと必死になったり 体が動かない

封筒の裏に差出人の名前はあったが、表に宛名はなかった。矢田さんが嘘をつくとは思えない

に対して理由をつけようとしているだけである。結局僕は何もしなかった。

「ここここ、ここはいろ」

が、 いように思えた 明確に僕あてのメッセージだとも断言できないのだ。早急に、僕が動くような筋合いではな

「なに考えてるの?」

ミニスカート、その下の、キャラメル色をしたニーハイブーツ。安定して完璧である。 隣で、オフホワイトのファー付きコートを着た亜美ちゃんが尋ねる。コートの下から少し出た

「なんにも」

僕はにっこりした。

クリスマス・イブの表参道はひとでごった返していた。

たるところにクリスマスツリー。白や金や、さすがにオシャレ感のある装飾である。 街路樹には、今は昼間だが、夜にはきらびやかに灯るだろう電飾がはりめぐらされていた。

Ų,

ゆらんゆらん歩いた。彼女の小さな体をさりげなくひきよせて庇いながら、ひとの波にたゆた

うことは楽しかった。

表参道ヒルズやラフォーレを見た。ひとで満ちていた。

ワタリウム美術館まで歩き、写真展を見てきた。また表参道方面まで戻ってくる。亜美ちゃん

は竹下通りを歩きたいと言った。

クだったからだ。

た二階にある店に入ると、びっくりした。いわゆるゴシックロリータ・ファッションのブティッ 立ち止まった彼女は上を見上げ、いたずらっぽい様子で一つの店を指差す。外の階段をのぼっ

ふんだんなフリルで重そうな、ワンピースがたくさん陳列されていた。

「いらっしゃいませ」

い編み上げブーツ、という出で立ちの店員が言った。 豪華な巻き髪のウィッグにヘッドドレス、詰め物でふくらんだ甘い花柄のスカート、 厚底の白

部分的に取り入れて着ているような客が数人いた。 「よくくるの? こういうとこ」 店内には、全身のコーディネートをかっちり決めているスタッフのほかに、好きなアイテムを

と、思わずキョロキョロしてしまいながら僕は尋ねる。

うふふ、と彼女は笑って

「わたし、高校生のときはいつも、あの店員さんみたいな格好をしてたのよ」

と言った。

意外だった。

店内を見まわす視界の端をかすめて、驚いて二度見したものがあった。

左右一組になって、 縦に何組か並べられた、鳥の羽根である。まるで壁から羽根が生えている

僕の視線をたどって、

ように見える

「あれは天使の羽根」

と亜美ちゃんが言った。

「ゴムベルトがついていて、背中にしょえるのよ」

白やグレーや茶、それに黒の、羽毛らしきものが固められた作りもの。壁にかけて展示してあ

るのだ。

んとなく羽根から目が離せずにいた。怪訝に思っていたわけではなくて、悪くないものに思えた。 ずっと羽根を眺めている僕に気付いて、亜美ちゃんは可笑しそうに言った。 なつかしい、とつぶやいたりしながら、にこにこした亜美ちゃんが店内を見てい , る間、 僕はな

「クリスマスプレゼントに買ってあげようか? CDのお礼に」

この日僕はすでに、亜美ちゃんへのプレゼントに、あらかじめリクエストをきいたCDをあげ

ラインの二○○五年発売のミニ・アルバ ていた。グレン・グールド演奏の、バッハのフランス組曲(輸入版)と、スパングルコールリリ 4

い。パスタごちそうしてもらったし」

僕は笑って胸の前で両手を振る。

きおいしいペスカトーレを食べてきたのだ。 ごちそうして、と頼んだ。彼女は裏通りにある小さなパスタ屋さんを予約してくれていて、さっ 亜美ちゃんも僕に事前に希望を訊いてくれたが、欲しい物も思いつかないので、じゃあお昼を

「さすがにおれ、 しょえないしね」

笑いながら言う。

「でもいいよね、天使って」 僕は思っていたことを言った。

「手足も使える上に、空を飛べて得だし」

「飛びたいの?」

と、彼女は訊いた。

僕はこたえあぐねた。とべたらいいのに、と言っていたやつはいた。

亜美ちゃんはやさしく笑って、僕の手を引いて導き、

アクセサリーが入ったガラスケースの上を指差した。ガラスの天板の上に小さな籠があり、 そ

の中にはガラス細工の天使の人形がいくつも入っていた。

「これはどう?

お守りになるよ」

いる、全長五センチに満たないくらいの人形だった。パステル調の色合いで、 小さな羽根をつけた円錐台形の胴体に、丸い頭部がのり、その上に黄色い輪っかがくっついて 胴体には縁日の水

口は赤の、点である。

三百円。

ヨーヨーみたいに、ぐるぐると細い模様が巻かれていた。目は黒、 思わずふふふ、と笑った。

「今日、お昼つきあってくれたお礼、気持ちだよ」

小さな紙袋に入れてもらった天使が、亜美ちゃんの手から僕の掌にのせられたとき、うれしか

ように感じた。恋人なんかと会うのだろうと思った。 五時半に、原宿駅の前で別れた。何となくだけれど、亜美ちゃんにはその後、別の約束がある

不思議な心持ちで帰途についた。亜美ちゃんの意外な過去が垣間見られたからかもしれない

手の中の小さな天使のせいかもしれない。ゴスロリは僕のなかでは「ふつう」とは言いがたかっ いま限りなく「ふつう」を体現している彼女の土台に、そういう要素が根付いている

ということなのだろうか。それとも今でも、混在しているのだろうか。

空の空

くとチンチンと音がした。 ていた。 帰りの地下鉄のなかで包装紙をむき、手のなかでもてあそんでいた人形は、すっかりぬくまっ ガラス製の天使は、 円錐台の簡略化された胴体を僕の掌に押し付けている。 爪で軽く叩

た。ホワイトクリスマスなんて、生まれてから一度も経験していな 十二月はまだそれほど寒くなく、ちょうどいい季候だと思う。 バスから降りて、マンションまでの坂道をゆっくりのぼる。 空には半分より太った月があっ

暖かいオレンジ色の照明を漏らす、マンションのエントランスホールに入っていくと、

郵便受けが集まって並んでいるスペースから、ふいっとひとが飛び出してきた。

突然のことにすこし驚いたが、住人だろうと軽く挨拶を口にしかけて

「あれつ」

「矢田さん?」 さらに驚い

「尾島君……」

我がクラスの委員長は、い つものように浮ついたところのない服装、 紺色のコートに黒 **つぽい** 

ズボンを履いていた。 深い赤のニット帽をかぶっている。

すこしおどおどと視線を泳がせながら、彼女は浅く頭を下げて立ち去ろうとする。

僕はとっさに呼び止めた。

「ねえ」 後ろ姿をみせたままぴくりと止まる。

「青柳んところ来たの?」

すこしの間のあと、こちらを見ないまま彼女はうなずいた。

「会えた? 話した?」

「いいえ。お留守だったみたいよ」 僕がすこし焦ったように尋ねると、彼女はふっと息を吐いてからくるりとこちらを振り向き、 いつもの冷静な口調を取り戻して言った。

「矢田さん、手、だして」 再び向けられた背中が、なんだかとても寂しそうに見えたので

「それじゃあね」

訝しげに差し出された掌に、 自分が持っていた天使の人形を握らせてしまった。

「メリークリスマス」

めたさはない。 どうしてそんなふうにしてしまったのか、今でもよくわからないのだが、 不思議と後悔や後ろ

41

ラッキーだ。 天使が、今度は矢田さんの手に触れて、すこしでも温かい気持ちを呼び寄せてくれれば、二重の という経験は僕のものだ。形は手元になくなっても経験はずっと僕のものだ。それで形を持った あの天使を僕が持っていても、その後どうすることもできなかったろう。亜美ちゃんがくれた

矢田さんは、ありがと……と言った。ぽかんとした様子で、天使をながめていた。 そういうのが僕の感じ方なのだけれど、あまり胸を張れたものではないのだろうか?

「送っていこうか?」 ときくと、彼女ははっとして、腕時計を見てブンブン首を横に振った。

「もうバスが来るから」

と急ぎ足で出ていった。

あのときの天使はどうなっただろう。

く呼んでいるうちに、いつのまにか引っ越しなんかに紛れて、なくなっていたらいいんじゃないか。

彼女の机の奥にでもしまわれて、小さな幸福をさりげな

残りの冬休みはこれといって何もなく過ぎた。寝坊してピアノを弾いていれば、あっという間だ。

一月七日から、三学期がはじまった。

南柏駅までバスに揺られながら、青柳のことを考えた。同じクラスなのだから、当然顔を合わ

43

ば日の当たらないコンクリートの地面にぶつかれるだろう。

返ったコンプレックスをむき出しにしているようなものだ。そういうのは「いたい」。それに案外、 せるだろう。そうしたら、声をかけてみようと思った。考えてみれば、何かを毛嫌いするのは裏

同時に、絶対ありえないと思いながらも、ありえないともいいきれないイメージが僕の中に育

話してみれば昔みたいに違和感なんてないかもしれない。

ープで立ち入り禁止になっている。 学校に着いたら、救急車やらパトカーやらが何台か集まっていて、構内の一角が黄色のテ

「飛び降りだって?」

「うちの生徒?」

警察のひとが制して、教室で待機するようにと促す……。

登校する生徒たちが現場の近くで歩く速度をゆるめて溜まっていきそうになる。そこを先生や

たりがよい そうだ。下に弓道場やごみ置き場があるし。専門教室のあるB棟の、外についた階段の一番上あ うちの学校で飛び降りるとしたらどこからだろう? 一般教室のあるA棟はあまり適してい のではないか。下にはプレハブ小屋の部室棟が並んでいるが、そこを外すように狙え

なかった。飛び降り以外の方法でならば、そもそもやらない気がした。 は騒ぎになっているんじゃないかって。あいつがやりそうな方法は飛び降りくらいしか想像でき 柏駅で電車から降りて、他の学生に混じって歩く道のり、ひそかにどきどきしていた。学校で

しかし、学校に着いても、 何の騒ぎも起きていなかった。救急車もパトカーもいない。

その代わりに、青柳は学校を休んだ。

青柳一、 は、風邪と」

出席をとるとき、担任が

とつぶやいていた。

を出さなかった。担任はすぐに、何も言わずに出席簿に青柳の欠席をつけるようになった。 つつがなく三学期がスタートしていったが、一週間経っても二週間経っても、青柳は学校に顔

たぶん皮膚が硬くなっているからだろうか、思考や行動があまり表立った動きをしなくなる。 月も後半になると冬本番、寒い。冬は不思議な気持ちにさせられる。

らかく、 しかし、春を待つ冬芽のように、冬眠する変温動物のように、 弱い。 かっちり固めた外皮のなかはやわ

春や夏に、外気温に開かれるようになる体と、真冬にコートを着てまで守りに入る体とでは

考える。デリケートだ。 考えることも違ってくるだろう。夏には馬鹿らしくて考えられないようなことも、冬には真顔で

徹底して内にこもる温もりを楽しめていればよいのだが、どこまでも澄んだ気持ちで、殺伐と

した思考を育ててしまうとしたら、すこしおそろしくもなる。

る僕の高校の中でも、かなり優秀な生徒である。 少数精鋭の進学塾の入ったビルの前で、矢田さんを見つけた。彼女は県内有数の難関校と言われ 学校の前を通る国道を、地下道で向こう側に渡ってから、駅方面に歩いていたときのことだ。 あるどんよりと曇った、鈍色の空の放課後だった。

心なしか、いつものきびきびした印象がないように感じられる彼女に呼びかけた。

「矢田さん」

僕は気になっていることを口にする。 彼女が僕を見上げる。すこし呆けたような表情で、力のない透明な瞳をしていた。

「最近……青柳は元気なのかな」

「……私には」

矢田さんは下を向いた。僕も彼女のスニーカーのつま先を眺めた。

「私にはもう、彼が元気かどうかはもちろん、 舟の上で、遠ざかっていく陸について話すような口ぶりだった。 体調を崩しているのか否かさえ、

わからないわ」

「もうずっと会っていないもの」

「二学期の終わりから」「いつから?」

の 美工を カレー

おそらく僕に渡した手紙を頼まれたとき以来、彼に会っていないのだろう。

「おれ……おれから、電話してみるよ!」

思わず力を入れてそう言ったが、矢田さんはどちらでもいい、

といった感じであいまい

てうなずくと、塾のビルへと入っていった。

れたところからにしたいと思った。関係のない人々の雑音を間にはさんで、自分自身や相手の気 い場所から電話をしたかった。彼に呼びかけるなら、ぜひともうちのマンションがある町から離 たいと思った。かといって喫茶店やファストフードの店内もよくない。そして絶対に、 道ばたや駅のコンコースに立って電話をする、というのは落ち着かない。できればイ 家ではな ・スに座

常磐緩行線のホームだ。上り方向の先頭近く、エスカレーターの裏側に、いつも空いているプラ 持ちに対して距離を置きたい。そういった感覚は、理屈ではなく体が選びとろうとするものだろう。 そうして腰を下ろしたのは、 柏駅のホームのベンチだった。 通学に使っている千代田線直通

ので、電車をやり過ごすひとは例外である。何本見送っても、いい文句は浮びそうになかった。 何を言おうかと考えながら、二本の電車を見送った。このホームには各駅停車しか止まらない

ええい、ままよ、と三本目が走り去ったところで電話をかけてみる。

出たと思ったら留守番電話だった。ピーと鳴った後に

「……青柳? お、尾島だけど……手紙? くれてありがとう……っと、また、話しましょう」

かくかくしながらも一応メッセージを入れておいた。 通話を切ると、ふうう、と大きな溜息がでた。

その頃には、マンションに帰り着くと、必ず青柳の家のバルコニーを見上げるようになってい

た。そこは、本格的な冬を迎えていよいよ寒々しい場所だった。

いっそ玄関まで訪ねてインターホンを押してみようかとも思ったが、正直に言うと、それは怖

留守電も入れたし、またすこし様子を見てみよう、と内心で言い訳をした。 なぜ怖かったのだろう。たぶん、雰囲気だった。外にむき出しの荒れたバルコニーや、い

47 空の空 閉ざされている北側の暗い窓-――そこは記憶が正しければ、青柳に与えられていた子ども部屋だ

った—

同じマンションに住んでいるというのに、同じクラスなのに、中学まではかなり親しく話して -が、分厚いバリケードのように見えた。

いたはずなのに、いま彼との間にある壁は厚かった。

青柳からの音沙汰はないまま、二月も半ばに差しかかった。

ッハの平均律は順調に新しい曲に進めていたが、僕のベートーヴェンはなかなか上達しなか

「送り出すイメージを描いて、そうね、悲しみをたたえながらも淡々と」

った。ソナタ第十二番の第三楽章は葬送行進曲である。

先生は言う。

絶不調だった。 僕はなんだかいつも肩に力が入ってしまって、全く余裕がなくなってしまった。 僕の前の時間枠で、 いつもは僕が来るまでレッスンをしている亜美ちゃんの姿も 特にその日は

どっとくたびれたようになりながら帰宅した。

見えなかった。

「おかえり」

った。パジャマ姿でテーブルにつき、本を読んでいた母の顔に、はっきりした陰影ができていた。 午後九時をまわった我が家のリビングは、二つある蛍光灯のうち一つしかついておらず、暗

「どうだった」

「うん……」 生返事をする。

「ピアノ、いつまでやる?」

母は訊いた。もうすぐ三年生だ。受験勉強を考えれば習い事ばかりもしていられまい。

「うん……考える」

ただ、今は無理、考えられない、と思いながら生返事を重ねた。

父は台所で煙草を吸いながら晩酌をする。母はその話し相手をする。父が仕事の話をしたり、 母が僕の分のご飯を用意してくれている間に、玄関が開く音がして父が帰宅した。

母がご近所の話題を提供したりする。

「派手にやっているらしいわ」

台所とリビングの間の壁を隔てて、僕は話し声を聞いている。

「青柳さんの?」

「そう、奥さんのヒステリーがすごいって。同じ階の前川さんが言ってた」

「筒抜けか。隣のひとなんかはたまらないだろうな」

何かを考える余裕もない上に、聞こえるものを受け流すエナジーも発揮できなかった。耳に入

ってくるもの全部を聞いてしまう。

早々に夕飯の肉豆腐を片付け、おやすみを言って部屋に戻る。

玄関のすぐ近くに僕の部屋はある。冷たい空気が吸いたくて、 コートを羽織り、サンダルを突

っかけて外に出た。

さない。エレベーター前の階段の、踊り場あたりに行こうと思った。 出てすぐのところは、 横一列に並ぶ各家の共有廊下であるため、ぼんやりと油を売るのには適

曇っていて星は見えなかった。 闇に白い息が立つ。

踊り場にやってくると、近ごろの習慣で青柳の家のバルコニーを見る。

7

ンションの各階の共

有廊下に灯っている明かりに対して、青柳の家は明かりもなく暗く見えた。 ばらくぼんやりそこに目をやっていると、もぞもぞ動きながら誰かが出て来たように見えた。

驚いて目をこすり、 もう一度よく見る。 たしかに人影である。 暗くて顔や服装は見えな

の高さの柵にもたれかかった。次に、ポケットを探り、 その人物は、辺りに転がるごみ類をまたぎながらバルコニーの端まで移動し、 何かを取り出した。片手の中で弄ってい みぞおちくらい

るものは、 ĺ ľ "。 ぼんやり発光しているように見えた。やがて持ち上げて耳にあてた。 携帯か。

瞬の間の後に、 僕の尻に振動が走った。僕は滑稽なほど体をはねさせてしまった。心臓が絞

めつけられた。

ブーッ。ブーッ。

僕の携帯が着信を知らせているのだ。 震える指で、 急いで取り出そうと尻ポケットを探るが、

焦りすぎて取り落としてしまった。

しゃがんで拾い、通話ボタンを押す。

「もしもし!」

つながった電話の向こうは沈黙だ。

いそいで立ち上がり、バルコニーに目を戻すと、 人影は柵に密着しているように見える。

いや、変だ。あれは柵の外側に立って、背中で柵に寄りかかっている。

「おいっ……青柳!?」

僕は送話口を通さずに叫

らんだ。

人影は気付いたように、こちらに顔を向けた。耳元に添えられていた携帯電話からの明かりが、

ぼんやりと顔を照らしていた。

その直後、 やわらかくほほえんでいた、 人影は虚空に向かって足を踏み出した。 気がする。

冷たい夜の闇に。

ためらいは一切見られな

かった。

ピーポーピーポー。

.

けたたましい救急車のサイレンで急に覚醒した。

カーテンがすこし開いた僕の部屋は、ぼんやり明るくなっている。朝のようだ?

横たわって

いた布団から跳ね起きた。

裸足で外に踊り出る。共通廊下の柵を掴み、 首を斜めにねじって身を乗り出すようにして、 青

柳家のバルコニーの下を見下ろした。

り禁止のテープや、野次馬や警察や救急隊員を目の当たりにすることを、覚悟していた。 今度こそリアルに、飛び散った血痕や、その周りにいままさに張り巡らされようとする立ち入

……ピーポーペーポーパーポー。

けれども救急車のサイレンはどこかに遠ざかっていった。

見下ろす地上には、いつもとすこしも変わらない駐車場が横たわっていた。しいんとしている。

五階のバルコニーにも何ら気配はなく、ごみの上に冬の朝日がしずかに降っている。 人影ひとつない、新しい朝のはじまりだった。

説明もなかった。 彼がずっと休んでいて、そのまま一度もクラスに顔を出さずに姿を消すことについては、 何の

諸連絡の時間になって、矢田さんがすっと静かに手を挙げた。僕はすこしどきっとした。

「昨日の委員長会議で決まったことですが」

彼女は平然としていた。

「卒業式の飾り付けのために、花をつくることになりました。薄紙を配るので、ひとりひとつ今

日中につくってください」

した矢田さんは、

前に出て各列に白い薄紙の束を配る。五枚ずつとって後ろにまわす。簡単につくりかたを説明

「つくり終えたらこの箱の中に入れておいてください」

と言ってダンボール箱を、 窓際の一番前の席の上に置いた。ずっと空いていた、 青柳のものだ

った席である。

空の空 だけだった。 い事といえば紅白だが、おそらくクラスごとの分担なのか、うちのクラスで配られた紙は白

53

「はいはいっと」

いびつな花だった。彼は一番乗りでその箱に花を投げ込んだ。 と言って、僕の前の席の田部はその場ですぐにつくりはじめる。折りも適当、開くのも適当で、

その日、時間が経つにつれ、少しずつダンボールは満たされていった。 ふわり、 ふわり、

僕はなぜだか自分の紙に手をつけず、じりじりとねばっていた。

スメートが出来上がった白い花を投げ入れていく。

「まだ花を入れていないひとは、つくって入れて帰ってください」

帰りのホームルームで再び手を挙げた矢田さんの連絡をうけて、 僕はようやく五枚重ねた薄紙

をじゃばらに折りはじめる。

こぼれ落ちんばかりに箱に盛り上がった白い花の上に、ひとつ、落としたところで、 僕の胸に

もすこしだけ息がとおった。

に広げて。あいつは、 地面に落ちなかったということは、飛んでいったのだ。形のない、見えない羽根をいっぱ あいつに課された苦しみを、空に溶かしてやったんだ。

あれから三年経って、僕は大学生になった。

青柳とは、 わりと仲のよかった田部とも、卒業と共に疎遠になった。 彼が転校して以来、一切の関わりがなくなった。矢田さんと言葉を交わす機会もな

時期、 亜美ちゃんに、あのクリスマス・イブ以来会うこともない。レッスンで顔を合わせなくなった 彼女は大学の長い休みを利用して、海外にホームステイに行っていたらしい。帰ってくる

前 ベートーヴェンの「葬送」を、 僕は三月の中旬でピアノのレッスンをやめたので、それきりになった。 結局うまく弾けずに終わった。一応最後に丸をもらったが、先

ンレ社原典版のブルーグレイの分厚い楽譜に、そのとき僕は、青柳の手紙を挟んでしまい

んだのだ。まるで封印するかのように。

生のおまけだった。

マンションの五階の青柳の家は、バルコニーの荷物も撤去され、程なくして中古物件として売

り出された。 の家は、 「しばらくの間モデルルームになっていたが、今は知らないひとが入ってい ローンを返し終えるまであと何年、そんな話を母がしていた。 実家はこれからも動

でも僕は、何となくあそこから抜け出たように思える。

かずにあそこに存在するだろう。

中身を折りたたんで戻したグレーの封筒の、何も書かれていない表紙を眺めた。 電車は綾瀬 一駅を過ぎ、晴れた空を隠して地下鉄線内に入って v

あのとき感じ

56

ていたようなピリピリした感触は、もう手に伝わってこない。

諦めのような、時が過ぎて意味の

近ごろでは、「ふつう」なんて、拘る意味のないくらいに広いものだと思うようになった。ど

VANITAS い範囲だ、と。 んなまなざしで世界を見ていようが、変だと気取られない最低限を抑えるならば、それは問題な

僕に遺書のような手紙を残して消えてしまった青柳だけでなく、いまは、あの頃僕の周りにい

たひとたちはみんないない。 きっとこの手紙も、 いつしか僕は何気なくごみ箱に入れてしまうだろう。

過去のじぶんを持ち続けてはいられないことに、うっすら気付きはじめていた。

## 入江にて

山川夜高

な礼服の黒いスーツを着込んでいたので驚いた。かつての葬儀のときは兄もまだ学生だったから、 白い軽トラックに乗った兄が知らせもなく帰ってきた。車を停めて降りた兄が、葬儀で着るよう 兄が帰ってきた日は特別おだやかで凪いでいた。晴れた日、妹が庭で洗濯物を干していると、

スーツではなく黒い学生服を来て、お堂に正座したのを思い出した。

ルーシートにくるまれた大きな荷物が残っていた。長さ二メートル程の細長い丸太のような大き ってくると、 トラックの荷台から魚の入ったクーラーボックスと野菜と生活用品を下ろしたが、まだ一つブ 妹が生魚を冷蔵庫に仕舞いに行っている間に、ブルーシートは解かれ 車の脇に立つ兄の隣に男がひとり立っていた。ずぶ濡れで表情のない知らない人物 ていた。 台所から戻

発見者である兄が引き取って連れてきた。見つけたときにはもう事切れてい からしょうがなかった、日頃言葉少なな兄がぽつりと付け足したのを妹は聞いた。 けさ海で拾ったと兄は言った。 水面に浮かんでいるその男を兄の乗ってい た。 た漁 お 船 が拾 n が見 (J 上げ、 つけた

蒼白 兄は言った。 ておくと言った。しばらくこの家で飼っておくと。 海 面 肌をして、 品に浮か 動きはすれど、 んでいたという水死体は、 頭のてっぺんからつま先までぐっしょりと水に濡れている。 何もしない。時間が経てば溶けてしまうらしい。 自分の力で立って歩いた。色あせたような白 それまで家に置 でも死んで 1/2 シャ ツに

てお ら縁 だしでいる水死体を家にそのまま上げるのはためらわれたので、兄は死体の足を拭く雑巾を取 業は水死体を庭か に家の中へ入っていき、妹と水死体が残され かった。水死体は思い 家に いても仕方がない。だから縁側に座らせて、日中庭に出しておくならいいと折り合った。 側か風呂場に置こうと提案した。妹は風呂場にも上げたくなかったが、 は上げられ ら縁側へ連れていくところから始まった。兄も妹も水死体に触れようとはしな ないと妹は反じた。 のほか従順で、 かんまんな動きではあるが、呼べば兄妹についてきた。 だって死んでい るのだ。 それに濡れてい かと言って外に置 . る。 兄は、 それ 作 は h

情だった。 妹 Ü 小柄な方で、 目 .鼻立ちはとても薄く印象のない容貌だった。表情は全くない。 水死体は背が 高 61 顔を盗み見ると、 生前 からなの か 死んだせ 何をしていても (J な 0 か 分

59 0 一暗で、 不意に目を伏せた死者と目 深く底の知れない濁ってよどんだ色をしていた。 が 合 (1) 妹はどきっとして目を逸らした。一瞬見えた死者の目は真

ころで、廊下を歩けば死者はまた足元を水でびしょびしょにした。待つようにと命じると死者は なかった。ぼうっとあたりを見ている死者を誘導して雑巾を踏ませた。けれども足を拭いたと

死者はあらゆる風景を一応眺めていたらしい。あたりを眺め、聞こえていたが、

物を考えては

帰ってこないが、面と向かって会えるときでも、兄妹はあまり会話を交わさない。水死体は縁側 そこで足を止めた。 いいて、 家の庭やその向こうに見える海を眺めているようだった。三月の午後はおだやかで何ひ 妹が野菜炒めを作り、廊下に面した和室に座って兄妹は昼食を取った。兄はたまにしか 命令は通じるようだった。

とつ起こらない。

開け広げた戸の向こうから潮風がかすかに吹き込んでくる。

めているようだった。兄の寝息が聞こえてきた。食器の片付けと麦茶を取りに台所へ向 んでいる彼は妹に背を向けて、生きた人間には興味がないというように、ただひたすらに海を眺 かもしれ じきに兄は畳に寝転がって午睡した。妹は食器の片付けがてら、邪魔にならないように部屋を ない。 しかし縁側に水死体を残しているのを思い出した。死者を一人にしては 人を襲いは、 まさか、 しないだろうけど、それでなくても行動が読 め かった。 な けな 妃

その家は一本の長い廊下で玄関から奥の間までつながっていて、庭に面した廊下を縁側にしてい

使っていないガラスのコップを戸棚から引っ張りだして麦茶を注いだ。妹自身の分と合わせて

すぐ行くと、

波止場が伸びているのが見える。

あちら側が漁業の中心地であり、

この家は

町

7はず

じめ麦茶にも妹にも気付いていないようだった。 かせるだろうかと心配はあったけれど、 とり広がっていた。あとで雑巾がけをしようと考えながら、雑巾がけをするために彼を上手くど 一杯の麦茶を廊下に持っていった。廊下に戻ると板張りの床には水死体から浸み出した水が 妹は彼に麦茶のグラスを差し出して様子を見た。彼はは

あの、と妹は呼びかける。 「お茶いりませんか」

まだ死者を正視できないでいた。 死者は答えなかった。 返事はないが、 かんまんに妹のことをふり返り見た。 妹は目を逸らした。

おそれはしていたが興味はあった。 は いたが、妹は辛抱して彼の傍にいてみることを努めた。長い午後の時間に妹は退屈 まるでお供え物みたいに差し出された麦茶に死者は手をつけなかった。 死者におそれを抱 してい

「あなたの名前は」と妹は訊いた。 返答はもちろんない。 死者は海を眺めている。 洗濯物が 治日差

しを浴びてやわらかそうに見 元える。

サボテンを飾っている。 くと砂浜まで歩い 庭はひらけていて海を臨めるが、砂利ばかりできれいな花もない。 て行ける。 防砂林には満たないが、庭の向こうには緑が茂り、 海岸 にはときおり何 かが打ち上げられ ている。 勝手口や納戸の脇に小さな けも 家 か ら西 の道を下 Iの方 -ってい

衣類をたたんで仕舞った。

n

に建ってい

え風が吹き込めば涼しすぎる。 たいきさつについて。でも兄も死者も家の中で黙りこんでいる。 る度にやつれを重ねているように見えた。 は着ていたスーツを脱いで、シャツに短パンと、楽な格好で眠っていた。 妹は兄にタオルケットを持ってきた。 妹は兄の話が聞きたかった。 妹は洗濯物を取り込んだ。 日焼けした兄の姿は帰宅す 仕事のことや死者を拾 三月の日中とは 兄の

兄 物は要らない た。死者は若干の興味を示したが、口元まで魚を持っていっても食べることはしなかった。 間 で傷まずにもつの ておくと兄は言った。いつまでもつか分からないけど家で飼っておく、と。次はいつ帰るの が 液はい 訊い 死者は雨 夕食を取っているとき、 たが、 向 らしい。 戸の内側に立たせていた。 兄は分からないと一言答えた。遠くなりそうだと妹は思った。 か V) か。 合う兄と水死体は同じぐらい びしょ濡れになった床を見て、こいつはときどき動かさないと駄目だなと あれは喋ったりするのだろうか。 兄はまた明日 廊下が死者の定位置になりそうだった。 から仕事に出て行くと告げた。 の年齢 兄は魚のあらを細かく刻んで死者に与え に見えた。 漁師 の兄は日に焼けて、 兄妹 死体は兄が帰 あれ が食卓 を家 心に置 かと るま 61 る

翌朝兄妹は早起きして、兄が身支度する間に妹は兄の弁当を作った。車に乗る兄を見送りに出

体

は蒼白だった。

妹は死者にあれこれ試す兄の様子を眺

めてい

た。

桶

に水を張って彼の足元に持っていった。

足を水に浸からせてから、

海

水 0 方が

ではないかと思い直したが、彼が滴らせているものが海水なのか真水なのかも知らないし、

巾を洗って干した。少なくとも兄が帰ってくるまでこの家で飼うつもりなのだか 和で風もなくおだやかな陽気だった。いつでもそうだったと妹は知っていた。妹は彼のため ず、洗濯物を見ていたり、じっとその場にうつむいていたり、 はよう」と妹は声をかけた。洗濯物を出すのに邪魔なので、妹は死者を一歩どかせた。 ラス戸を開 を築いた兄妹では 妹は洗濯物を回した。 けてい の頭に手をおいて、 ・ると、 なかった。 死者は 死者は一晩中廊下にたたずんでいて、眠りをとった様子はなかった。 「お 少なくとも兄はそういうことをしなかったし、 (J つの間にか背後について来ていた。 しかし別れの一言も言わなかった。 向こうの海を眺めていた。 あたりをうろつき回 妹もそれに習った。 縁側 ŋ の雑 Ú のが

兄は妹

彼らはお喋りを交わして絆

かった。死者は常にずぶ濡れだが、汚れそうな様子はないので着替えの必要もなさそうだった。 |鉢植えと、 妹は死者を連れ 水死体と一昼夜を過ごし、 おとなしく言葉を聞いた。戻るよと妹が言えば家の中について来た。 同じ食器やタオルを使うことは避けたいが、妹と死者の隔たりはその程度なのかもしれな そこにあるものを指さして子供に教えるみたいに語った。死者は頷きもしなかった て家の周りを歩きまわった。 彼が無害そうであると、 手持ち無沙汰だったのだ。 妹は判断した。 過度に接すること、 縁側に彼を留まらせて、 これがサボテン、 触 れる

彼で別段変化も思うところもなさそうだった。

んすの上を雑巾で拭き、畳を掃いて、植物に水をやる。生きているもの、生き物ではないもの 間は かりがありあまる日々だった。 妹は時間をつぶすために家の掃除を日課にしていた。 た

は死者に近づくことにした。時間だけならあまるほどあった。妹は死者の隣に座り、 世話をするのは慣れてい 妹 、は死者のことを何も知らない。 死者はどうやら、 た。 ならば死んでいるものの世話も果たせるのだろうか。 生者をおびやかさない。答えがなくても妹 海を見つめ

はもう止まっている。彼の人生は終わっている。 「でも、名前 生きていたら根ほり葉ほり尋ねていたのだろうと思った。彼は死んでいて答えない。 は聞いてみたい な 彼 いの時間

る彼を眺めた。はだしの爪がいやに白いのが印象に残った。死んでいるのだ。半開きの口

が力ない。

多い方だった。それに、ここには妹と彼しかいない。 の方がよかっただろうか なあというか、 答えない人に話しかけるのは独り言も同然だし、 ですと言うべきか、 迷った末に妹の言葉は脱力した独り言のような語 年長者である彼に対して、やはりですます 留守にしがちの兄をもったためか独り言は 尾 に なっ

身の回りの物は揚がらなかったか、はじめから持っていなかったのかもしれない。 ~は兄 0 荷物の なかから彼の遺品を探そうとした。それらしいかばんの一つも見つからなかっ

こにいる彼は死んでいる。どうもしてやれないのだと妹は悟った。 分が身元を知ったとして、どうするというのだろうか。彼の生まれや名前を知ったところで、こ

流れ着いたのだと想像するのが一番似合った。 溺れたのだろうか。船が沈んだんだろうか。彼は自殺者のような気がした。身投げしてここに

ない。そのときはまた海に沈めたほうがいいだろうか。 うだ。でも全く動かないでいて、蝿がたかったら困ると考えた。うじが湧いたら飼うことはでき 縁側に戻ると彼は変わらない姿勢で座っていた。動くなと言い つければ一日中微動だにしなそ

海は凪いでいる。彼にも過去があるということを妹は知ってい

「名無しのごんべえ」、全然似合わない。 「水死さん」、失礼か。

るらしい。入ってい 名前のことは切り上げて妹は食事にした。妹がいない間、死者は廊下のどこかに座り込んでい い部屋、 いけない部屋は既に教えこんでいた。畳の部屋は入っては けない。

台所と玄関も入らない。風呂場、手洗い場もあまり入れない。結局、 廊下の奥のほうになる。

いたい縁側のあたりである。じきにタオルかマットを敷こうと妹は考えた。

65 き妹を不慣れな気分にさせた。彼は見ている。雨戸を閉ざすと海が見えないので、 長 い間 ほとんどの日々を妹は一人で過ごしてきた。廊下に彼という視線があるのは、ときど 家の中の物を

して何か気にするようなことはないのだ。 目も瞑らずにたたずんでいる。 見て過ごしている。彼は見ているだけで、きっと考えてはいない。真っ暗になった家の中でも、 暗闇の中から蒼白い姿がかすかに浮かぶことがある。 妹が彼に対

消灯する前に声をかけた。

「おやすみなさい

返事はないし、水死体はきっと眠らない。

いう点において、 はひどく不安になった。死者のずぶ濡れの白い素肌を触れようという気にはなれなかった。そう と考えた。でも彼は死んでいる。そのために自分が彼の身体を洗わなければならないと思い、妹 のことを連想して、彼が風呂にはいる必要性、 だりを悟った。妹は死者をおそれていた。たとえこれから飼うと決めたとしても。 布団に入って彼の名前をあてどなく考えていると寝付けなくなった。彼のための縁側 たとえ彼が人のように自立して過ごしているとしても、 虫がつかないように清潔に保たなければならない 生活と死者の決定的な の足拭き

由来もあって、妹は呼び名をなかなか気に入った。早速廊下にいた彼に「おはよう、ヨドミさん」 ヨドミという素敵な名前を思いついた。失礼な聞こえ方はしないし、 よどんだ目という

と声をかけた。名前を与えられても死者はやはり何とも思わないようだった。

海をじっと凝視していた。

だった。

してあげる。 矢継ぎ早に声をかけたら意味を聞き取れないだろうか。そう分かっていても妹はまくし立てた。 はだしのまま出歩いたらガラスを踏んで怪我するかもしれな 1/2

戸を開けるよ。

洗濯物が終わったら散歩に行かない?

ちょっと待っててね、

サンダルを探

「まだここにいて待っていてね。わたしはご飯を食べて着替えて髪を結んで、洗濯物を回して外

 $\exists$ サンダルを下駄箱から引っ張りだした。外は晴れ、おだやかなそよ風が海の方から吹いてくる。 て濁っている。 こには海 さざ波が浅瀬の砂をかき混ぜて、巻き上げながら砂浜に押し寄せた。波打際 ヨドミ氏は相槌も打たなかった。妹はとても満足した。朝の仕事を片付けて、使われていない 位の間 は 青く、 浜は小さな入江である。 このけもの道を下って海の方へ出た。 沖に出ればけっこうきれいだと兄は言っていた。波打際が濁っていても、 沖では海底が見えることもあった。 魚が打ち上げられていて、 家は丘の上にあって、少し下ればすぐに砂浜 ヨドミ氏は今までで一番強い反応を示し、 二羽のカラスが目玉を突いてい の水は砂が混 晴れた た。

るのは好きだった。ときどき魚影を目撃できた。 家に一人でいても仕方のないとき、妹は浜に足を運んだ。波の寄せたり引いたりするのを見て 浜に流れ着いたものを探して歩くのも楽しみ

VANITAS 68 にしているだろうか。ずっと同じ場所に立ち尽くしていたら、動かないエサだと思われて襲われ び立ち、 わったものは上がっていなかった。魚の死体に近づくと、カラスが鳴いて、ほんの少し遠くに飛 か知りたくて、 ヨドミ氏は茫然と遠くの方を眺めていた。 飼うにあたって、食い荒らされて傷がつくのは絶対に避けたかった。カラスはヨドミ氏を気 また着地してこちらを伺った。 妹は死者が見ているさまを見ていた。海は凪いでいた。 カラスにヨドミ氏が突つかれるのを妹 水平線はもやがかかって白んでいた。 死んだ魚のほかに は避けようと決め 何を見てい

には変 る

るかもしれない。

妹はヨドミ氏を歩かせた。それから、

いつも上空を飛んでいるトンビにも気を

つけなければならないと思った。

り、今では 失わないこと、動物から遠ざけることを守らなければならないと、これからの生活のことを考えた。 の長い犬だった。その犬が死んで、今度は猫が家に寄りついた。その猫もいつしか現れなくな 海外線に沿って歩いた。目を離すとヨドミ氏はふらふらと遠くに行ってしまいそうである。見 動物は家の隅に巣を張っている蜘蛛ぐらいしかいなかった。 妹は覚えていないのだが、兄が犬を飼っていた。 仔山羊ぐらい の大きさの、茶色く

そうだと思いはじめた。妹にとって背の高いヨドミ氏を連れて歩くのは気分がよかった。鳥に気

きるとは思えない。でも名前をつけて散歩させてみると、少なくとも縁日の金魚よりは長持ちし

水死体はすぐ死ぬものだと考えていた。

死体が

犬や猫

ほどに長く生

日のうちは、

はなから、

ユ

をつけながらあたりを歩いて、 食料品を買いに行こうとして、 家に戻ったのは昼過ぎだった。 留守中のヨドミ氏の対処に悩 んだ。 出掛けるたびに雨

戸 を引

を置 的に風呂場に閉じ込めた。外鍵はかけられないが仕方がない。なるべく急いで、しかも今後死者 て閉じ込めるなんて大げさである。動かないようにと言いつければきっとそれを守るので、 いて出歩く必要の少ないように、いつもより多く買い込んだ。帰宅するとヨドミ氏 浴槽に残っていた水を海を見ていたときのように凝視して待っていた。 は風 一時

滲ませる何だか知 連れて行って庭から海を見せ、おとなしくしている間に風呂場の掃除をした。ずぶ濡れの死者が れない液体が排水口に流れていった。 風呂の掃除は苦ではなかった。 もしも風

呂に入れてお

いたら水槽で飼っているみたいだと思った。

の床に座り込み、

て取り分けて、 側に座っているヨドミ氏に、ゼリーやヨーグルトや寒天やアイスクリームを少量ずつすくっ 彼が食すかどうかを試した。スプーンは使い捨てのプラスチック製のを買ってき

も興味なく、 妹はヨドミ氏の死を決定的に自覚する。 死者に自分達の使う食器を使わせることは出来ない。 ゼリーと寒天は口をわずかに開けたが飲み込まず、口から破片がこぼれて落ちた。 ヨドミ氏はヨーグルトには見向きもせず、バニラアイス ときおりこうやって、 潔癖 脈感に

崩 言の口 の中 は 肌 の色よりも血色が悪く、 湿 って蒼白な舌が 宿 えた。 妹は かつて葬儀 で見

リの肉厚な花びらを思い出した。 なめらかでいて血が通っていない点で、 生花は遺体を連想さ

すのを、 者が使うことはできない。生々しく、しかし死んでいる彼の唇が、 その口 妹は目を背けられずにまざまざと目撃した。しっとりと濡れた温度のない唇、 の中に宛てがわれたスプーンは、 死者の内部に深入りしたために、 寒天の破片を拒絶して吐 もう生きて それは妹 る

間 ことはないが、不用意に触らないほうがいいと判断した。水浸しで真っ白いからには、 に牙を剥くことは決してないのに、決定的な畏怖の対象として目に強く焼きつ よりずっと寒天みたいに脆そうで、 死者の腿の上に落ちた寒天をスプーンですくって流しに捨てた。 触れたら傷んでしまう気がした。 彼 の素肌にも衣服に ζį 生きた人 も触れた

方でヨドミ氏自身は何かに触れようとして手を伸ばすことをしなかった。

ヨドミ氏は

縁側に

彼 も首や視線をきょろきょろ動かしたりはせず、 を摘んだり石を拾ったり、そういう動きをしたことはなかった。ただあたりを眺めてい 黙って座っていて、ときどき庭や海の方へ歩いた。歩いては立ち止まりその場にたたずんだ。 るだけ |の興味は極端に狭かった。食べ物を差し出してもたいがい気付きもしないように見えた。 歩の代わりに家の中を案内した。座敷の部屋には立ち入らせない。ふすまを開いて中を見せ に留 め 彼も彼で家の中にいて退屈しているのではな 海や水たまりや足元を何も言わずに見 1/2 かと思った つめてい た。 花

ば水浸しになり板が腐ってしまうだろう。彼が面白く感じるとは思えないが、

ひたひたと廊下を歩くと水のはねる音がした。

い、家の中を歩きまわこまめに拭かなけれ

の足音はとても小さい。

事らしい。「きれいだね」と妹は話しかけた。死者は会話に答えなかった。 しも眩しがる様子もなく、ただ遠くの海を見つめていた。結局どんなものよりも海が一番の関心 納屋の方もぐるりと見せた。そしてまた庭を一周して、海岸に足を運んだ。日が傾い 南向きの海に夕日が反射してちらちらと眩しかった。目を細めた妹に対して、 彼は少 て潮が

間違いなかった。死者は自分の沈んだ場所をじっと見つめているのかもしれなかった。 生前の彼も海が好きだったのだろうと妹は察した。それでなくてもこの沖合で彼が死

っておいたらヨドミ氏はまたあの海へ還るのだろうと、そう思えてならなかった。 ヨドミ氏はかんまんな動作で目を伏せ、妹をちらりと見るようにしてのろのろと家へ帰った。放 ふいに、ヨドミ氏がまた沈んでしまう気がしてならなくなった。「戻ろう」と妹はせがんだ。

に立つよりもずっと良いだろうと考えた。かつて庭の片隅にあった犬小屋の様子を思い出してい 夜、廊下の拭き掃除をして、足ふきマットの上に彼を留まらせる実験をした。板張りの床に直

あの犬は、犬も猫も、家の外で飼っていたが、室内で飼われる犬猫が用を足すためのマット

はできるのだろう。 を連想した。 彼は妹が命じたことを聞き入れてじっとしている。意味が伝わっていなくても生活

「ヨドミさんはどこからきたの?」

食べないだろうと思いながらも夕食の残りを少しすくって彼の口元に宛てがった。夕飯はほと

んど魚だった。 海は好き?」 海辺の町では魚介に困らない。

「魚は見えた?」

「ここの海はきれ ?

「うちはどう?」

りかまわない方がいいのだろうと分かっていても世話を焼いてしまう。 れなくて。お水は コップを口の端にあてて傾けたが、水は唇を伝って肌の上を流れ、死者の喉を通らない。 いらない? 水は飲んでもいいんじゃないかな」

「本当は何か食べたかったり、やりたいことあるんじゃないかな。ごめんね、

わたしが見つけら

ぶしつけな言葉だと妹は自覚して、なおも語りかけていた。ヨドミ氏は傷つかない。

垂 れた水の落ちる先を追って、妹は目を伏せ、「ごめんね」と零した。死んだ人には不満も希

長者だった。享年三〇にも満たないだろうが、年長者であり、早すぎる死だった。 望もないのに、自分が関わっていいのだろうか、そうでなくても目の前の死者は妹にとっては年

が空けられていきそうな気がしはじめ、自らの無防備さにおそれを抱き、妹はまたも目を反らし た目で穴が空くほど見ている。じっと目を合わせていると、見られているうちに自分の身体に穴 顔を上げるとヨドミ氏が妹を見つめていた。 食器や花壇を眺めていたときのように、 黒々とし

73

って妹は、 色のな 彼の口元から首元にかけてを凝視はせず視野に捉えていた。白いシャツが濡れて肌 彼が自分を観察していたのだと察した。 い唇のせいで寒そうに見えた。 黙っていたがひしひしと視線を感じていた。 あとにな に吸い付

が見つかることはなかったが、 に目を凝らし、気に入った貝殻やガラス片を拾い集めるのを楽しみにしていた。そう毎日良 かを見つめたり興味のある方へ歩いていくだけで、相変わらずの過ごし方をしていた。 晴 :れた日には洗濯物を干した。雨が降らなければ毎日ヨドミ氏と海 物を拾うことはずっと継続しており、家の引き出しにはかなりの にへ出向 いた。 彼は 妹は砂浜 () 物

打ち上げられていた魚はいつの間にかいなくなっていた。食われて骨が残っているわけでもな 本当にいなくなっていた。また波に流されたらしかった。 あるいは誰かが拾っていったのか。

数

《の拾い物がたまっている。

「むかしタコが打ち上げられていたことがあったんだよ」

妹は隣のヨドミ氏に語った。

「まだ生きていたけどそこら中を這ったあとでもう弱ってた。 兄が捕まえて家でさばいたところ

を見たよ。 一本になってもゆれるようにぐねぐねと動いていたのを妹は見た。魚も、 タコ の血って青っぽくて、身体を切られてもずっと動いているんだね さばかれてもなお

生きていたときのように痙攣しているのを知ってい

タコとか、大きなものが流れ着いてきた日は嬉しい。

から、 その日見つけたガラス片は好みの緑色をしていて気に入ったが、 拾わずにそのまま砂浜に残した。 ふと海中に目を向けたら、 魚の群れが浅瀬に向 まだ角が取れずに尖っていた

かってぐ

るりと回ってくるところだった。

「見て!」と妹は声をかけた。

小魚たちは入江をひるがえってまた外洋に帰った。

があっただろうかと妹は考えた。

ヨドミ氏も魚の群れを見ていた。

まばたき一つしないようだった。そういえば目を瞑ったこと

する気がかりだけがあとに残った。もちろん誰も、 がかりになった。 見て、と言った自身の声が、叫んだときのように大声になってしまったのが、 気にすることではないし悔やんでいるわけでもないのだが、 ヨドミ氏にも、妹の声は聞こえていなかった。 ただ自分自身に対 妹にはひどく気

を脱ぎ、はだしになって波打際を歩いた。ふいに大波が寄せて妹の足にかぶり、まだ冷たい水温 線になって残されていた。濡れた砂の上の方が足場が固められていて歩きやすい。 繰り返す潮 の満ち引きで、 砂浜には泡や漂着物が打ち上げられ、 波の寄せた跡 が幾重 じきに妹 か 0 がは 靴

けていた不浄な気はまったく感じなかった。死者は妹に出会う前からこの海の中でとっくに死ん て妹は一安心した。そして自分が死者と同じ水に浸かっていることに気付いた。あれ 朓 に妹は甲高い声を上げた。ヨドミ氏の足も水に触れていた。 めてい た海 にやっと足をつけたことへの感慨にふける気配もない。 冷たい水に動じた様子はなく、 変わった様子が なない ほど気にか 0 日夜 を見

ら書きをしようと試みたが、 小枝が落ちていた。波に磨かれてすべすべとしていた。妹は小枝を拾い上げ、浜に何か 特別書きたいことなどなかったので、棒倒しをするように砂に枝を Ų, たず

ろうと、妹は思いを馳せた。

でいたし、

彼を除いても幾人も、

それは人に限らずあらゆるものが、

この海に沈んでいるからだ

「海の中はきれいだった?」 ヨドミ氏は波に浸かるか浸からないかの狭間に立って海を見ていた。 口の端からわずかに

突き刺した。

た。遠くに船が静止している。 線の彼方まで限りなく湛えられた水の中では、 滴ってい るのが見えた。 彼の足元でその液体は海水と混ざり合った。 清浄も不浄もないまぜになり、 妹は彼に歩み寄った。 等しく波に洗われ

「沈んだとき、どう思った? 怖かった? 忘れ物はあった? きっと、 あったよね。 でなきゃ、

75 戻ってこないよね

今や妹の足はすっかりくるぶしまで水に浸かっていた。

春の海は天候の暖かさに対してまだ冬

の冷たさを残していたが、波の感触は柔らかく丸い 「独り言なの。返事は、ないけど。本当は言いたいことたくさんあるけど、 全部は言えな

分からない。 聞いてくれる人もい わたしは変だね ない でも聞いてほしいのかな。自分に言い聞かせて確かめたい のかな。

りこんでいてもさざ波の音が絶えずあたりを満たしていた。 大きな波が寄せて、死者の足を水で浸した。返す波が砂をさらい、 浜に刺した棒を倒した。

黙

「わたし遠くにいてもいつも波の音が聞こえている気がする」 死者は一切沈黙していた。

「苦しかった?」

似をして投石した。 砂浜に上がった。足元の小石を拾い上げ、凪いだ頃合いを見計らい、 思ったが、沈黙する死者の前に、妹は伸ばした手を止めた。死者の傍をすれ違い、 冷たさに慣れた足で、ざぶざぶと波を立てて、妹は死者に近寄った。 じきにヨドミ氏にぶつけたくなった。 石は 一度も跳ねずに沈んだ。沈んだ石を死者は見ていた。 無防備な背中に思い切り石をぶつけてみたい 兄が得意だった水切りの真 いよ いよ触れそうだとも 続けて二度の はだしのまま 没石

と思った。石を握りしめたまま、振りかぶっていよいよ投げつけようと思った瞬間さえあった。

n く。乾いて縮んで溶けかけたものや、もはや破片と化したものもあった。目の前に落ちてい 状の糸くずのような器官や紅色の点々が透けて見えた。クラゲは、ときどき、集団で浜に流 はまだ生きていたときの形を残していた。 浜 に透明な塊が落ちていた。両てのひらで抱えられる位のゲル状の丸い 塊である。 白 4) コ

返したとしても、息を吹き返して再び泳ぎだすことはないだろうと直感した。 る、クラゲだった塊を眺めた。たとえば打ち上げられてしまったこのクラゲをつまんで海に投げ 今は判断はつかないと妹は知っていた。妹は浜にしゃがみこんで、ぺったりと打ち上げられ 生きていると言えるのか、いつ死んだことになるのか、妹はしばらく思いを巡らせた。もちろん った。ぶつ切りにされてなお動いていたタコと生死の見分けのつかないクラゲは、どちらの方が 妹はつま先でクラゲを小突いた。透明でやわらかいばかりで、死んでいるのかも定かではなか っ い

隣にヨドミ氏が V) た。 しゃがみ込みは しなかったが、死んだクラゲを見下ろしてい た。 彼

の零

切りが付いたとでもいうふうに、反動をつけてぐっと立ち上がり、海面をぎらぎら反射される陽 光をまっすぐ見つめた。妹は空腹を感じた。波音を除いて目に見えるものすべてが黙りこんで の肩に落ちたが、妹は気に留めないふりをした。 というよりもいっそその一滴によって踏ん

間を浪費していれば、

じきに兄は帰ってくるのだ。

海 疲れきってしまいたいと妹は願った。身体にむち打つつもりでとぼとぼ歩いた。そうやって時 岸を歩き出した。 進むのはいつも漁村と反対の東の方角へだった。

無遠慮に投げかけつづけた。死者が応えることはないと妹はとっくに承知していた。 道程を歩きながら、 妹は、 思いつくままにヨドミ氏に語りかけた。 見えたものや思っ

「でも知っているんだよ」と、その沈黙に対して妹は応じた。「あなたはわたしのこと聞こえてる」 それが自力で手に入れた、 最初のお守りの言葉だった。

こむと白い コンクリートの上にはフジツボばかりへばりついている。妹は堤防の先端に立った。 東へ行くと岩場を利用した小さな堤防が海へと伸びている。 影がよぎるのが見えた。死者は堤防の半ばあたりで立ち止まっていた。 船着場として使われては 海中を覗き ない。

て流れていく風景を見送っているような気がし始める。不在感に似た酔いだった。自分がここに まるで自分の方が動いているような、

流されているような錯覚に陥る。 自分が静止

Į 海 面

は絶えず流 船

n てい

の甲板に立

るので、

入江の方へ波が寄せる。寄せる水の流れを横目に見る。

遠ざかっていくさまを、 立っているという事実と、 いるということから自由になったような気がした。同時に、実際の世界と思考の内側が永久にか 妹は自覚した。 自分が海上で流されているような感覚、 酔いの自覚に妹はかすかな快楽を味わった。 実体験と思考が か いまここに み合わずに

彼女の想像が及ば もおしまい に交わること、打ち上げられた魚やクラゲ、それらもまた妹が見たおしまいであることのひとつ みじめな身体で海岸を引き返さないといけない。どちらにせよ取り返しがつかないのだ。 んだらおしまいだ。もし溺れ死んだとしても、浮上して岸に戻ったとしても、寒くてずぶ濡れの おしまいというのは取り返しのつかなさだった。たとえばと妹は思う。今ここでこの海に飛び込 づけたら、 み合わない であった。妹はおしまいの瀬戸際で遊ぶことを覚えた。おしまいの寸前は魅力的だった。けれど でいたら 身体と思考の重なりが断たれてしまったら、 の向こう側を、 ないほど、 -今は意図して思考の遊離をあそんでいるが、 妹は知らない。知りたくない。 おしまいは隔てられている。 その時はおしまいなのだろうとも察した。 地続きの国境線を越えるよりもずっと、 不随意に身体と心が離れ 水死:

ヒトデは乾い 振り返るとヨドミ氏は足元に目を落としていた。緑がかった体色に赤い模様が入ったヒトデが の上に落ちていた。 て 固 てなっていた。 妹はつま先で小突き、反応がないのを見て指でつまんでひっくり返した。 身体の裏側に生えた白 Ü 触手はすべて活動を止めてい

ヨドミ氏にヒトデを差し出した。 ヨドミ氏は受け取らなかった。妹はヒトデを海に捨てた。 死

暮れなずむ空の端は薄桃色。 体が海底に沈んでいくのを、ヨドミ氏は目で追った。

った。触れたら戻れなくなると思った。

「ヨドミさん

めている。日差しは暖かくそよ風が冷たい。洗濯物は船の帆のように風をはらんでふくらんでいる。 妹はうずくまり、水死体の傍らにいる。 家の廊下に二人はいる。水を張った風呂桶に足を浸したヨドミ氏は、黙り込んで外の世界を眺 触れそうなくらい近くにいたが、触れることはしなか

うずくまったまま声を掛けた。庭へ開け放たれた縁側の空気は肌寒かった。

あれから、 妹は、集めたシーグラスをひっくり返し、本当の気に入りだけを残して、

他を海

れのために、光の加減で真珠層のような虹色が浮かび上がっていた。 ばらまいた。手元に残ったガラス片は白いのが一つと青いのが二つで、 偶然による複雑なひび割

彼女はガラス片を握りしめてまどろんでいる。

「ヨドミさん

妹の腫れぼったい唇が半開きのまま言葉を探す。声を上げる前からすでに泣き出しそうだった。 ガラスが擦れ合い甲高く鳴った。この鋭利な欠片で人肌を傷つけてしまいたい。

なかった。 寝そべりながら身に降りかかる感傷とあそんでいた。結局、自分自身を除いて、遊び相手は現れ

「ヨドミさん」

三たび声をかけた。

「どうして死んでしまったの」

していた。道は、まったく一本道だったのに。 けれど、と妹は声を上げる。覚えたての感傷を振りかざして。感情がせめぎ合っているふりを けれど、死んでいなかったら、妹とその男は出会わなかった。

妹は彼の膝に頭をあずけて眠りたかった。それどころか、欲しかったのは、ただ一度の相槌だ

ガルシア

## 目玉の裏側をみせると、 おきの話をしてやろう」と片目をつむって話を始めた。話をしている間はずっと片目を閉じてい ていて僕が木の前を通ると必ず「俺は上、お前は下。かわいそうなやつだな。仕方ない、とって 段と逆の方向へ曲がると空と地面が逆さになった町へ出るとか、猫に話しかけられて真剣に議論 したら負かされてしまい涙していたときに慰めてくれたのが今の妻だとか。 ンケーキに垂れて食べてみたらストロベリージャムの味がしたとか、学校へ行く途中の路地を普 左目で外を見る。右目は中を見る。俺の頭の中だ。 ガルシアはいつもおもしろい話をしてくれた。きのう間違ってナイフで指を切って出た血 んは実に満足そうだった。 一度訊いたことがある。どうして右目を閉じているのか。 お前はびっくりするだろう。これは愛だ。「愛だ」と述べるときのガル 中を見ると目玉がひっくりかえる。 ガルシアはこんなことを言った。 ガルシアは木に登っ

ガルシアが死んだのはつい最近のことだ。僕がいつもの木の前を通ったとき、ガルシアの姿は

VANITAS 深い谷の底に消えていった。僕は右目をつむり、 に無数の蟻がいて、大勢で大きなガルシアを運んでいた。そのまま崖から捨てられたガルシアは、 が いた。 あわてて近寄るとガルシアは息絶えたまま動いた。 ガルシアが倒れていた草むらに戻った。 いや、よく見るとガルシアの体 ガル

ストロベリージャムだった。 ガルシアの血 が僕の胃の中でハ ムスターのような小動物に変わ

いっぱいにほおばった。予想していた通り、その味

僕は閉じた右目で「愛だよ」と満足そうに

ていくのを感じた。 僕は今日もお腹をなでながら、 彼のいた木に登って彼の話を思い出している。 3

語るガルシアを見ながら、血のかたまりを口

アが流した血は乾いてチーズのように固まっていた。

84

なか

~った。

変だな、

と思

17

周りの草むらを探した。

頭から血を流しうつぶせになったガル

スイマーズ 佐藤芙有

山川夜高 http://libsy.web.fc2.com/

 ゲスト
 田中バイオ

 表紙装画
 上原悠里

## **VANITAS**

スイマー Vol.3

2014年11月24日 初版発行

発行者 スイマーズ

http://minasoco.jimdo.com/ swimmers.info@gmail.com

印刷 コミックモール (文伸印刷株式会社)

乱丁・落丁本はお取り返しますのでお早めにご連絡ください Copyright(c) 2014 SWIMMERS All Rights Reserved.